



王府井や西単の真新しい街路を歩いていると、記憶の淵にモノクロームの影を映すかつての北京は、今から思えば、うらやましいほど文化の多様性に満ちていたことに気づかされる。物資が不足していた時代だった。人々の生活は、その不足をおぎなう工夫に満ちて、質素に輝いていた。永久牌（ブランド）の自転車で大街を走り、小巷を溜達溜達（リウダリウダ）（散歩、北京方言）すると、そこには時代という時間の積みかさねに育まれた風物や伝統的な慣習、建築物や文物などがあちこちに散見された。北京の街は、かつて、それ自体がひとつの文化、とまでいわれた所以である。

[文・写真].....中島秋彦

北京の街を東西に紡ぐ庶民の生活街道

この街を東から西に、あるいは西から東へ小刻みに紡いでいるのが「胡同」とよばれる小路である。横町と訳されたりするが、ちよつとニュアンスが異なる。日本と中国の庶民の生活をつつむ空気感の違い、と云えばいいかもしれない。胡同には、炒豆胡同、羊肉胡同、あるいは甘井胡同など市井の人々の生活に根ざした命名が多い。死胡同とよばれるものもある。出口のない、行き止まりの袋小路のことを指す。記憶の中の北京に

胡同は牛の毛ほども多い



は、城内にも城外にも、ほぼ原形に近い胡同が無数に残っていた。20年以上もむかしのことである。

胡同の起源は元王朝（1279～1368）にまでさかのぼる。元は西夏、金、南宋を併せ、異民族のモンゴル族が中国を統一した最初の王朝であった。世祖のフビライは両都制をとった。上都開平府を内蒙古のドロンノール（多倫）に開き、大都を現在の北京に築城した。上都を夏営地、大都を冬営地とし、約3000キロある両都を季節にあわせて移動した。胡同は冬営地である大都のすみずみにまで血を通わせて栄養を送る、いわば毛細血管のような役割を担った。

胡同の溜達溜達（リウダリウダ）に戻らなければならぬ。

古い北京人は、胡同は牛の毛ほども多い、と自慢する。民国30年（1941）に出版された北京案内記（新民印書館発行）は、城内に1800、城外に1400、あわせて3200条と計数している。下つて1986年、『北京的胡同』（翁立著、北京燕山出版社）には、城内外あわせて1316条と記されている。

『析津誌』（熊夢祥著、析津は現在の

胡同

都市の中の小宇宙

北京付近を指す）によれば、元朝は胡同の道幅を六歩と決めた。一步は約1・3メートル。したがって六歩は7・8メートルとなる。現在の胡同の道幅も、ほぼこれに準じている。人ひとりがやっと通行できるような狭い胡同も、もちろんある。天橋地区の西永安路北辺にある小喇叭胡同（最狭部58センチ）、大柵欄の銭市胡同（同44センチ）などがそれで、その名の示すように、まさにラッパの筒のように細い。

東西に走る胡同を南北につないでいるのが「街」とか「大街」とよばれる通りである。胡同から胡同を南から北へ、あるいは北から南へ縦走するときの要路となる。「街」の道幅は11歩（14メートル）、「大街」は23歩（30メートル）だった（前出、『析津誌』）。胡同と胡同、あるいは胡同と大街を斜に結んでいるのは「斜街」で、楊梅竹斜街とか上斜街、王広福斜街などの名称がなじみ深い。そのほか、「巷」とよばれる小路もある。これ

らは広義で胡同の範疇に含まれることが多い。

八大胡同で歌妓と清遊する

胡同の起源が元朝の大都にあることは、すでに触れた。元朝がモンゴル族の統一王朝であったことも書いた。元人は巷や街のことを胡同とよんだ。胡同の語源はモンゴル語の井戸だといわれる。水が湧くところに人が住





【上】胡同は雑踏を寄せつけない異空間（大柵欄南辺）
 【右】塼の端にこんな精緻なレリーフがある（大柵欄南辺）
 【左】水を打ったような静けさにつつまれる（炭児胡同）

み、それが大きくなると巷になり、街になる。

長安街から王府井大街に折れて北へ進むと、ほどなく左手に大甜水井胡同の入り口が見えてくる。大きな、甘い水の井戸なので、飲料水として使われたものだろう。飲用に適さない水は、苦水と称される。紫禁城まで目と鼻の先の距離だから、王府に飲み水を補給する井戸として使われたに違いない。この場合の王府とは、皇帝の係累が住まう住居のことを指している。王府井の再開発で、この胡同は大街からはじき出された小店舗のふきだまりとなり、零落した老醜をさらして悲しい。大甜水井の一本南の筋にあった小甜水井胡同は区画整理で消滅し、今は市井の人々の話題にももたらなくなってしまった。

胡同の溜達溜達は、王府井大街から大柵欄に移る。

歴史の中の大柵欄は、百年老店老舗（が）林立する一大商埠地であった。外省ばかりか、遠く外国からも碧眼の商人がここに集まった。世界の商都で花街を欠くものは稀である。しばらく、いにしえの北京の遊里について語るのを許していただきたい。『京都勝跡』（胡玉遠主編、北京燕山出



【上】冬支度に忙しい延寿街（炭
児胡同）
【右】子供のころを思いだす懐か
しい駄菓子屋（三井胡同）
【左】居民委員会が塀に描いた宣
伝画（楊竹梅斜街）



「……歌妓たちに齢をたずねると、
「我呀、十六歳（あたし、十六歳よ）」
と答えた。翌年になって、再びたず
ねると、臆面もなく、やはり十六歳と
答えたのは哀れであった……」

た。
妓館には4種類の等級があった。
頭等は清吟小班、二等が茶室、三等は
下処で、四等が小下処とよばれた。頭
等の清吟小班は、その名が示すよう
に歌妓のいるところで、本来は清く
遊ぶ場所だったといわれる。戦前か
ら敗戦にかけて北京に駐在した白井
武夫氏は、その名著『北京追想』（東
方書店）で述懐している。

版社）によれば、
前門外の大柵欄西
街から鉄樹斜街に
いたる地区の南辺
一帯は、北京では
有名な花柳の巷
だった。且脂胡
同、百順胡同、韓
家胡同、大外廊営
胡同、小外廊営胡
同、陝西巷、石頭
胡同、王広福斜街
がそれで、俗称を
八大胡同といっ

頭等での清吟小班的寿命は短く、
その間に、よい旦那を見つけて落籍
されないかぎり、容色の衰えとも
に、茶室へ身を落とさなければなら
ない。茶室以下は、清遊の場ではな
かった、とも記している。

大都が育んだ小宇宙

さまざまな散歩を続ける。足は大柵
欄の北側にまわりこみ、瑠璃廠へと
続く路地、楊梅竹斜街をいく。胡同の
入り口に、数軒、旅館がある。清朝、
民国時代の北京の都市相を克明に描
いた『燕都叢考』（陳宗蕃著、北京古
籍出版社）は、その第三章「外二区各
街市」の冒頭でこの辺りの地理に触
れ、「旅館最多、交通、鹽業兩銀行在
其北」と解説している。大柵欄は百年
老店が林立する一大商埠地であった
ことは、さきに触れた。商人宿などの
宿泊施設が充実していたのである。

瑠璃廠東街の街口を左に見て、買
い物客で雑踏する延寿街に進入する。
その先には、炭児胡同、耀武胡同、大
耳胡同など十数条が、鼠色の壁をつ
なぎの寢床のように横たえている。
胡同に一步入ると、延寿街の雑踏は
消え、水を打ったような静けさにつ
つまれる。



【右】朱色の門が斜光をあびて美しい
【左上】門環（ドアノッカー）。獣面を型どったものもある
【左下】門の両脇を守る抱鼓石。北京方言で門墩（メンドル）とよばれる



観音開きの門がある。朱色の扉が午後の斜光をあびて美しい。胡同の内側を形成する庶民の住宅である。王城の地、北京の建物は、大小を問わず様式が類型化している。皇帝の係累が住まう王府も、庶民の住宅も形式が同じなのだ。この場合の形式とは、北京の独特な建築様式である四合院、あるいは三合院のことを指す。三合院とは四合院の変形で、門のすぐ後ろの使用人らが寝起きする南棟を省いた簡易型であった。門の入り口両脇では、獅子のレリーフをほどこした抱鼓石（土台石）が訪問客を威圧する。神社の狛犬のようにも見える抱鼓石のことを、北京方言で門メンドルとよぶ。

門は半開きに開いているが、奥に屏風のような石の壁があるので、路地から内部を覗くことはできない。かつて北京の街は、ぐるりを城壁で守られていた。それと同じように、四合院も壁に囲まれている。門以外に窓はない。重くて厚い門扉を閉じれば、外部の世界と完全に遮断される。四合院に二階はないから、中庭の上空はさえぎるものがない。小宇宙、といえる。

モンゴル人の移動用住居、ゲル（蒙古テント）のことを、にわかに思い出

した。ゲルも天窓があるだけで、側面に窓を穿っていない。胡同の起源は、元王朝の大都にあった。元朝は、モンゴル人が打ちたてた中国最初の統一国家でもあった。

幼少期を中国で送った竹内実氏は、その著書『北京（文春文庫）』の中で、民国時代の胡同に暮らした庶民の風景を鮮やかに描いている。

……学校の教師や事務所の職員であれば、中庭は一つで、垂花門はない。三合院であろう。勤務時間を終わって帰ってくれば、小宇宙の帝王である。誰にもさまたげられない。中庭の花や金魚を眺め、花に水をやり、子供を抱いて、あやす。絵を描いたり、習字をする。夏は葦ものすだれで、藤棚のような日除けを張るから、藤椅子をもちだして、夕涼みをする……

三合院を外から覗くことはできない。内からは、耳を澄ませば、通行人の声や物音で、外の様子をうかがうことができた。中庭で金魚を眺め、子供をあやした人の耳に、胡同を流して歩く糖胡蘆タングルー売りや、刃物ときの呼び声が、長く、低く、尾を引いて、静かにこだましていたに違いない。

【特集】胡同、都市の中の小宇宙

胡同の所在地

街頭で売っている北京遊覧図などを開くと、地図のほぼ全域に胡同を見つけることができる。

足の便が良い地下鉄駅周辺（旧城壁内外）の胡同集中地区は下記の通り。

大柵欄（前門下車）
西長安街（天安門西下車）
西単（西単下車）
西四（阜成門下車）
鼓楼（鼓楼大街下車）
安定門（安定門下車）
朝陽門（朝陽門下車）
建国門（建国門下車）
崇文門（崇文門下車）

上記駅付近を通過する大街、あるいは街を地図でたどっていけば、その周辺に無数の胡同を見つけることができる。また地下鉄駅から、タクシー、バスなどを組み合わせて使えば、城内、城外のほとんどの胡同に行き着くことができる。



人力車で観光

観光料金

1時間80元～100元が目安。トラブルを避けるため、乗る前にきちんと料金交渉をすること。

観光コース

人力車の遊覧サービスは、鼓楼周辺と大柵欄界隈にある。何れも、お決まりのコースがある。行きたいところがある場合、車夫に希望をはっきり伝える。

古船遊覧

鼓楼周辺では、前海、后海で古船に乗って船遊びもできる。人力車とのセット観光も可能。

胡同を人力車でめぐる

つつきり、チョコレート色の肌をした車夫が、背中に玉の汗をかいて引いてくれる二輪車を想像していたら、なんと、自転車リヤカー式の三輪車だった。なるほど、車夫にとっては、これのほうが、はるかに楽だ。スピードが出るので、効率的でもある。但し、風情に欠ける。

胡同観光に三輪車を導入したのは、北京胡同文化遊覧有限公司（www.hutongtour.com）という会社である。社長は徐勇氏。元北京広告会社の専属カメラマンだった。脱サラといっている。最近はライセンスを持たない無許可の遊覧会社が増え、市場を荒らされているらしい。

三輪車は、串団子のような形をした糖葫蘆（山査子の実を飴でくるんだ菓子）売り、刃物とき、靴なおしなど、さまざまな胡同の商売人として、さまざまに胡同の商人とすれ違う。鳥籠を提げて散歩する老人にでくわすかもしれない。北京人は小鳥に凝り、鳥籠に凝る。面白い風景に出会ったら、車夫に車を止めてもらって、ゆっくり観察しよう。路地に流れる時間のように、ゆったりとした気分で見学するのが、胡同には似合っている。